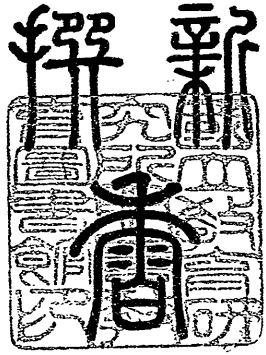


K220.72

27a

3



川習亭帖

仙客來遊雲外巔  
神龍栖老洞中淵

雪如紈素煙如柄  
白扇倒懸東海天

鞭聲肅之夜渡河  
曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍  
流星光底逸長蛇

ナイアガラ瀑布は世界  
中の最大なる瀑布にして  
雄偉壯快遙ふ人の意表に

出で白虹飛龍の比喻もそ  
れ真景の萬分一を形容  
すること能はざるなり

至德洽乾坤清化朗嘉辰  
四海既無為九域正清淳

元首壽千歲股肱頌三春  
優游沐恩者誰不仰芳塵

霜威收水語夜色壓燈花  
喜汝雙鞋道尋吾獨樹家

詩思老益退酒味寒方加  
問字無多暇何辭到曉鴉

それ美術の上乗なるものは  
能く民衆の情趣風尚を  
導きて崇高純潔な域に

臻らしめ得べく又百般の  
工藝の美術に指導に依りて  
其製作の品位を高め得べし



あだにすぎ守なけふの目を  
今日は再びかへり来ず  
むだも暮すふらのとらを  
今年いまたもめどり来ず

たゞ時の間如日影たふ  
惜みし人もあるものを  
まふびの庭につとふ子よ  
焼ますつめやをへ草

謹啟拜啟為翰

貴書拜讀披見

多善清福勇健

茂如似嘉清光

無事安忘休神

依輕傳之承旨

協議照會附件

事情近況彙上

有獨訪公來三

起言親切第謝

感銘造憾殊念

曾向紹介面会

缺禮寬大容之如

高謙為命者說



風兮世評之見

奕係聯珠華一理

所志年及物本

參考元覽後學

委細面唾可仕以

大略如新<sub>ニ</sub>造<sub>ル</sub>座<sub>ノ</sub>後

不取教道通志中只

勿之敬也 故首

来る十日より修学旅行  
とて日光足尾方面へ出

敷二十五日物校の豫言に  
此座の右道通を中へ出

月。

學之助

父上様

書中紙の雜記帳四冊購  
求め幸便とて送付した

小石妹へも二冊送分與  
東山主人之發

兄より

愛次郎殿

研究会の像を付函面議  
仕りたてし岩隈手あぶら

今夕五時頃より拙宅へ  
遊覧勞下されたるを



月日

竹村

松聖見

謹啓休業中の者歟  
ら如不ど漸く記述を了し

君曾杜撰古存以入也  
此一境亦佳了以勿之却首

自

文雄生

蒼系先生

函丈

天朝の法を一命を抛ち上る再  
お顔の像の真覚東茶一と運

強之いふ采幣を採て拜顔可  
仕の峰を正名公りを以て天の坂

吾鄙名を輝しんを以て此を  
衣被下是まで年来我儘不

孝の罪を山と名えんを此後  
権様実効可事入此境也

洋字はうらなして和名は人の  
名と片假名にて書ふは又なる

是を和書はるを見て漢籍を  
見ぬ人の世よりいれは

十尋女おな陸にふたあふく可なる  
名付くさい女らよねまのよそに

唐傳の秘を尋しよふあふれが  
あらぬよふくは田舎あふくまらふ

葉生法師

いんがもあはぬ山はけの  
阿比日よりこそ喜ぶたみえされ

中ノ字九

藤原時基

ねとまはくは音まはるるを  
あはれとこそたのまふべし

源宗景

秋野もあまの見をぬかすは  
と志のなや花のふら舞

平光幹

吉野山をよりのこりて  
けふなむかひの春れをる雪



027017

# 松石香川習字書



明明明明  
治治治治  
四四三三  
十十九九  
年年年年  
一十二二  
月月月月  
七四九六  
日日日日  
訂發印  
正再版  
版版發  
行刊行刷

所著  
權作  
有作

發行所

新撰香川習字帖 上中下各定價金廿六錢

書者 著作發行所 發行所 印刷所

東京市神田區  
真保町一番地  
千葉縣千葉町

三多

省田

堂屋

書支

店店

香川 龜能神三  
川 熊忠 鼎三  
井 勢保 周藏  
東京市神田區真保町一番地  
千葉縣千葉町本町三丁目  
東京市神田區真保町一番地  
省田 堂屋 印刷部  
東京市神田區三崎河岸第十二號地

